市立博物館の歩み〈No. 3〉～民俗分野の市民協働～

加藤 隆志

はじめに

相模原市立博物館は、昭和 56 年（1981）４月に教育委員会社会教育課（当時）内に博物館準備係を置いて建設準備を開始以来、14 年８カ月弱の準備期間を経て平成７年（1995）11 月 20 日の市制記念日に開館し、今年度で 24 年目を迎えた。その間、常設展示や特別展・企画展はもとより、さまざまな教育普及活動や資料の収集・整理保管、調査研究等、多方面な活動を展開してきた。こうした活動の状況については毎年の「年報」に記載されてきたが、当館の年報は基本的に館内で作成、印刷したもので、事業の説明や視察対応などのごく限られた機会に使用されるのみとなっている。そして、これらの年報は博物館ホームページ上の「博物館の概要」の中に、平成７～ 12 年度まではスキャン画面、13 年度以降はＰＤＦファイルで公開されているものの、当然のことながら年度ごとの収録となっている。

筆者はこれまで本『研究報告』において、館全体の各年度に実施した特別展・企画展・収蔵品展についての内容及び、筆者の担当である民俗分野の講演会や講座等の教育普及を中心とした活動についてまとめている（注 1）が、今回記していくのは民俗分野を中心とした市民協働の活動である。

当館には、各分野あるいは館全体の教育普及活動に係わる市民の会があり、学芸職員とともにそれぞれ多様な活動を展開するなど、市民との協働に力を入れている。平成 29 年度の全てのグループの登録者数は 265 名で、年度内の延べ活動者数は 2.702 名を数える。ちなみに上記の年報において、初めて特別展や企画展に係わる「展示活動協力員」が記されたのが平成 17 年度年報であり、さらに 20 年度からは「11　市民との協働」との項目が新たに設けられ、「市民学芸員」（注 2）以下七団体が紹介されている。これは年報に掲載された 20 年度にそれぞれの会が結成されたというのではなく、それ以前からの活動を受けて、年報にもきちんと記載するとの判断から項目立てがされたものと言える。民俗分野でも 20 年度年報に民俗調査会Ａ・Ｂがあり、後にも述べるように両会は 19 年度に結成されてすでに活動を積み重ねていて、その活動はすでに 10 年以上に及んでいる。

筆者は、やはり本誌にこうした市民の活動についてこれまでにもいくつか紹介しているが、今回は全体を見据えた上で、改めて筆者が係わった民俗関係の会のそれぞれの活動や展開についてまとめておくことにしたい。

（1）道祖神を調べる会

筆者が本格的に市民とともに活動を行った最初のものは、平成 14 年（2002）度から 17 年（2005）度まで実施した民俗講座「道祖神を調べる会」（全 40 回）である。もちろん平成７年の開館以来、毎年何らかの民俗講座を実施しており、野外のフィールドワークを伴う民俗講座も実施していたが、それまでは参加者と一緒に野外に出て、歩きながら主に筆者が民俗学的な観点から説明を加えていたため、参加者は受動的な側面が強いものであった。そこで地域のさまざまな民俗を参加者自らが調べていくようなものも取り入れたいと考え、その点を明示して参加者を募集したのがこの講座である。市域及び周辺地域の道祖神の石碑見学並びに、関係行事のフィールドワークと館内での勉強会を行う一方、市内各地で１月に行われている「団子焼き」（どんど焼き・サイトバライ）行事や道祖神碑について参加者自らが調べていくもので、実際の調査は平成 16 ～ 18 年の三年間実施した。（注 3）

この調査では、団子焼き当日に道祖神碑を覆うように藁製の小屋を作るが二時間ほど後にはすぐ燃やしてしまう地区など、大人数で回らなければ把握することが難しい事例が各地で発見されるとともに、古くからの集落ばかりではなく第二次世界大戦以後に住宅地化した場所であっても行事が行われており、市域全体では決して過去のものではなく、現在でも見られる地域の年中行事の一つであることが明らかになった。各地区で同時に行われる行事は、学芸員だけでは一度に把握できる事例は限られざるを得ず、そのため通常は、地域の中で古くからの様相を比較的留めているとされる地区や特徴的な事例をもって代表させるのが一般的である。しかし、今回の調査によって分かったのは、実際の行事は共通する要素も見られる一方で、現状では場所ごとに異なる様相を示し

ていることもしばしばあるということであった。それと並んで、この調査に拠って市内の21世紀初頭の団子焼き行事の様相を知ることができ、首都圏近郊の急激な開発を経た相模原においても行事は地域の中で一定の役割を果していることが分かるなど、さまざまな資料や情報を集積する使命を有する博物館にとって大変貴重なデータが得られたのであり、まさに地域で活動する博物館ならではの、市民とともに行う調査の特徴が生かされた成果を得ることができたと言えよう。

なお、17年度には講座参加者の有志が別に「サヘノカミの会」を結成し、講座で積み重ねてきたデータを生かしてさらに追調査を行い、同年度の博物館開館10周年記念特別展「博物館10年のあゆみ」の中での民俗分野の展示の一部として「相模原市内の道祖神石塔とドンド焼き」を担った点も大きな成果であったことを付記しておきたい。

（2）民俗調査会

平成18～21年（2006～09）に実施した「民俗に親しむ会」は「道祖神を調べる会」の終了後に行った民俗講座であり、毎月一回、野外のフィールドワークとそれを基にした館内の学習会を交互に繰り返して行ったもので、地域の歴史や文化についてテーマを限定せず広く民俗学的な視点で捉えていくことを内容とした。そして、「民俗に親しむ会」を進めつつ、一方で平成19年2月に結成したのが「民俗調査会」であった。会の結成に際しては、ある程度、内容や状況を理解されている「民俗に親しむ会」の参加者にまず呼びかけを行い、その結果、平日でないと活動できないという方と土日曜日の都合が良いという参加者がいたため、基本的には毎月第二水曜日に集まる調査会A（17名）と、第四土曜日を定例日とする調査会B（31名）の二つができた（実際には両方参加する方が相当数あった）。

民俗調査会は、フィールドワークを楽しみながら学芸員と市民がともに市域の民俗について調べ、データを蓄積して折りに触れて成果を発信していくことを目的として、学芸員が準備から実施まで設える講座とは異なり、参加する市民が諸作業を分担しながらさまざまな活動を進めていくものとした。結成当初は、後述する二つの特別展と企画展の準備から開催に到る内容に係わることを中心に据えた（注4）。

調査会Aについては、平成20年（2008）10月4日～11月30日に開催した特別展「みてみて津久井ただいま調査中！第二期～津久井の歴史と文化～」において「甲州道中を歩く」のコーナーを担当した。相模原市は平成18～19年にかけて津久井郡四町と合併しており、特別展は津久井地域を紹介するため、夏季の自然編と秋季の人文編に分けて企画された。民俗調査会が行った内容は、甲州道中四か宿（関野・吉野・与瀬・小原）を中心に、山梨県の上野原駅から東京都八王子の小仏峠を含む高尾駅までを実際に歩き、その間の神社寺院や石仏などについてデータをまとめて展示したもので、自ら作成した地図や航空写真などを交えて甲州道中の旧道を紹介した。さらに関連事業として一般の市民を広報誌で募り、調査会Aに参加する市民が調べた成果を基に、ＪＲ中央線相模湖駅から藤野駅までを案内して歩く探訪会を実施した。

これに対して調査会Bの活動は、平成21年（2009）の「横浜開港150周年記念」に関わる企画展の関係である。当面の活動名を「横浜への道」として、市域（相模湖駅）から日米和親条約が締結された地である関内地区の横浜開港資料館を目指して月に一回ずつ歩いていき、やはりその途中の景観や社寺、小祀小堂、石仏や道標などについてデータを収集していった。実際の歩いた回数は雨天で午後打ち切りが一回あるため全12回半で、歩いた距離の概算は約130kmに及んだ。

調査会Bでは、参加者が30名を越えて多かったこともあって四つの班に分け、各班での進め方や班内での分担は自由であるものの、各回ごとに当番班のメンバーがコースの検討から資料作成・下見・当日の進行までの一切の責任を持つようにした（注5）。こうした進め方は参加者がかなりの責任を負うことになり、大きな負担となったことは間違いのないところではあるが、終了後の会員へのアンケートでは、長丁場のフィールドワークを完歩できたことの喜びや、自ら準備して作成した資料を基にフィールドワークが実施され、さらに後の展示に活用されることの意義等も挙げられ、課題を抱えながらも大きな成果があったと評価できるものとなった。

これらの成果は平成21年9月26日～11月23日を会期とする企画展「市民と歩いた横浜への道」の中で、一つのコーナーとして他の展示資料とは別に展示し、会員が自らが担当した班の歩いたコース（一つの班で三か所）を示したパネルを作成したほか、展示作業や関連事業「市民が歩いた横浜への道発表会」（全3回）の開催まで多くの作業を分担して行った。

以上が民俗調査会の発足当初の活動内容であるが、例えば、調査会Bではその後も別のテーマを設定して、やはり班ごとに資料作成の諸準備から当日の進行・案内まで責任を負うスタイルをしばらく継続するなど、ABともに展示の終了後も活動を継続している（注6）。そうした中で特筆すべき点の一つは、調査会Aで平成23年

(2011) 度の活動として「相模原散策マップ」を作成したことである。これは市内新磯地区のフィールドワークを行って民俗的な観点から散策マップを作り、マップは手軽に持ち運びできるＡ４サイズで表面に地図と裏面には解説を載せたものとし、北部ルートと南部ルートの二コースを設定することにした。神社や寺院・石仏など、地域に残るさまざまなものをすべて取り上げることは当然無理であり、その中から何を選び出し、どのような説明を付けるか相当に悩むとともに、地図化に当たっては例えばトイレの位置なども確認しなければならない。このようなことを頭に入れながら会員が苦労しながらも数回のフィールドワークを行い、工夫をしてようやく完成した。この散策マップは、北部コース・南部コースとも館のホームページで公開している。

さらに、散策マップの南部ルートを使って実際に平成26年（2014）３月に第１回目の「民俗探訪会」を行った。ここでも会員以外の市民からの参加者を募集し、南部ルートのマップを参加者に配布してそのコースを歩いていき、ポイントごとに筆者のみならず作成の中心となった調査会Ａの会員が担当を決めて説明をした。そのほかの会員も歩行の誘導や交通安全への配慮など、事故なくスムーズに進行できるように気を配り、歩いている途中には参加者に気軽に声を掛けるなど、和やかな雰囲気の中で実施できるように務めた。このような試みは、前述の特別展「みてみて津久井ただいま調査中！第二期～津久井の歴史と文化～」関連事業でも行ったが、今回は自らがこだわって作成したマップの言わばお披露目としての意味を持つことになり、大変意義ある機会となった。民俗調査会Ａによる民俗探訪会は、既存のさまざまなマップを活用しつつその後も行い、毎回場所を変えながら合併前の相模原地域の各地区を中心に全10回企画した（このうち一回は雨天のため中止）。

さらに調査会Ａでは平成24年（2012）から横浜市歴史博物館の「民俗に親しむ会」との交流会を実施している。この会は平成20年度に同館で開催された民俗講座「民俗の見方、調べ方」を母体として結成された会で、当館と横浜市博が交流することになったきっかけは、横浜市博の「民俗の見方、調べ方」の講師に筆者が依頼され、両館の市民グループ相互の交流会を横浜市博の民俗担当学芸員に申し入れたことによる。

実際の交流会としては、平成24年５月に相模原市中央区田名地区に横浜の民俗に親しむ会会員が訪れて民俗調査会Ａ会員が案内し、10月には民俗調査会Ａが横浜市鶴見区を訪れて民俗に親しむ会に説明いただくことで始まり（注7）、翌年にはまず４月に両地域ともにかつて盛んに信仰された伊勢原市の大山阿夫利神社とそこに向う大山道、次に当時、民俗を調べる会がテーマとしていた鶴見川流域の川崎市麻生区岡上から横浜市青葉区寺家地区（注8）、さらに26年（2014）４月に全国的にも庚申塔の古形が残るとされる茅ヶ崎市北部地域（注9）、27年10月に石仏等の石材に多用される七沢石をテーマに厚木市七沢地区を中心としたフィールドワークなど（注10）、交流会を重ねて行った。そして、横浜市博では、民俗に親しむ会でのフィールドワークの成果を生かしながら、27年１月31日～３月15日に企画展「鶴見川流域のくらし―生業・水運・信仰―」を開催したが、その信仰の展示の中で、民俗に親しむ会からの依頼により、民俗調査会Ａで鶴見川支流である恩田川流域の町田市域に分布する狛犬と石工の調査を受け持ち、そのデータを提出することも行っている（注11）。

長年にわたる調査会の活動は、市内外へのさまざまなフィールドワークはもとより、民俗探訪会や他館との交流など多くの広がりを持ち、当館の市民協働に拠る活動が一層充実したものとなったことは間違いないところである。

（３）水曜会

博物館には展示室にある資料以外にも多くの資料が収蔵され、資料の内容に応じた整理作業が行われているのは当然のことではあるが、時として実感するのは、こうした大切な作業が博物館で日々行われていることが一般にはあまり理解されていないという点である。そのような状況において、資料整理の重要性を訴えるための方法の一つとして、実際に市民が資料整理に携わることから理解を深めていくことが挙げられる。当館の民俗分野では資料整理に係わる会が二つあり、水曜会は基本的に毎月奇数週の水曜日午後に活動し、津久井郷土資料室（合併前は「津久井郡郷土資料館」）が保管していた資料の整理を行っている。

津久井郷土資料室は、城山ダム（津久井湖）の建設に伴う地域の民具類の収集と保存を行うことをきっかけとして昭和46年（1971）に当時の津久井町中野にあった旧蚕業取締所中野支所の建物を利用して開館したもので、相模湖町（当時）在住の鈴木重光氏（1887～1967）らが収集した膨大な資料を保管していた。鈴木重光氏は、緑区若柳の奥畑集落出身で、青年団活動をはじめ、さまざまな面で地域の発展に力を尽くした地元の名士である。民俗学や郷土史の分野でも、大正７年（1918）夏に日本民俗学の創始者である柳田國男らの郷土会会員によって内郷村（旧相模湖町若柳及び寸沢嵐地区）で行われた、

わが国における地域の共同調査のさきがけとされる民俗をはじめとした調査に際し地元で対応した者の一人であり、内郷村調査以後も大正13年（1924）に『相州内郷村話』を刊行するなど、津久井地域の民俗を中心に調査研究を進め、神奈川県の民俗学や郷土史に大きな足跡を残している。

当室保管の資料は、ダム建設により水没した地区を中心に収集された農具や漁具・生活用具などの民俗資料をはじめ、江戸時代からの古文書、明治以降の記録類や教科書、津久井地域を中心とした絵葉書、雑誌及び書籍、新聞のスクラップ、チラシ･パンフレット、新聞、包装紙、手紙などというように実に多岐に渡り、年代や場所も地元のものだけに限らず広い範囲に及んでいる。

これらの資料は津久井地域で刊行された町史類の執筆に利用され、古文書や一部の絵葉書、雑誌・図書、教科書などについては整理が行われてきたものの、そのほかの多くのものについてはダンボール等に入れられて手付かずのまま残されており、全体像を把握するには到底及ばなかった。そこで、これらの資料の整理作業を平成23年（2011）１月から水曜会で開始したもので、当初は市民学芸員に登録されている方に声を掛けた（結成時14名･29年度19名）。作業的にはダンボールに納められている資料を箱ごとに取り出し、内容を確認しながら目録を作るといったオーソドックスなもので、平成31年（2019）１月現在で活動日数は延べ245日に及び、約46,000点以上の資料について整理や目録化を進めてきた。現在までの資料の内訳等の概略は本稿の最後に付記する。（※）

長年に渡る水曜会の整理において民俗学の観点から特に注目されるのは、柳田國男に関する資料が資料整理の過程で新たに発見されたことである。前述のように大正7年に行われた内郷村の共同調査は、その後の柳田における民俗学の形成に大きな意味を持ち、一方で、鈴木の『相州内郷村話』が柳田が関与した『炉辺叢書』の一冊として刊行されるなど、鈴木にとっても柳田との出会いはその後の学問や人生にとって重要であった。内郷村調査以降も柳田と鈴木の交流は長く続いており、両者の親密な交流を示す葉書などが新たに見つかったのである。こうした葉書類は他の葉書と一緒にまとまって収納されていて、水曜会会員が一点ずつ確認していったことで見つかったものであり、まさにおざなりではない丁寧な資料整理の成果と言うことができよう（注12）

このほか水曜会の活動では、例えば鈴木重光氏の出身地である緑区若柳や大正7年の内郷村調査の際に柳田一行が宿泊場所とした正覚寺を訪れるなど、館内での作業とともに年に何回かは津久井地域をはじめとした野外でのフィールドワークを実施し、目の前の資料だけでなく、地域を歩いた実感を基に作業を進めて行った。そして、こうした資料整理の成果を示すことを目的に収蔵品展を数回実施し、第１回「津久井郷土資料室所蔵資料紹介～市民の力で博物館資料へ～」（平成23年10月２日～24年２月26日）は、郷土資料室にある資料の中から、特に相模湖の建設や湖完成以前も含む地域の観光、大正９年（1920）に行われた第一回目の国勢調査、現在の裁判員制度にも通じる戦前の陪審員制度、相模湖がカヌー会場となった昭和39年（1964）の東京オリンピック関係等の特徴ある資料を展示した。この第１回目の展示については、水曜会として展示は初めての試みであった関係もあり、展示の企画や資料の選択・解説パネル等の作成は筆者が担当し、会員は列品・撤収作業を中心に行った。

翌年の第２回は「内郷の学校と子どもたち」（平成24年９月16日～10月28日）をテーマとし、地元の内郷小学校や桂北小学校をはじめとしたいくつかの学校と地域の生活の係わりを表す資料を展示した。第２回目は企画からテーマ設定･展示資料選択などの諸準備､実際の列品、解説文やキャプション作成、終了後の撤収に至る一連の作業のほとんどを水曜会が担うこととした。そして、第３回は、「埋もれた“モノ”に光を！　津久井郷土資料室資料紹介③～市民の力で博物館資料へ～」（平成25年９月14日～10月27日）として、改めて津久井郷土資料室には実にさまざまな資料が残されていることを紹介するとともに、一見するとガラクタのようなものでも数を集め、きちんと整理することでそれらが存在した時代や地域の状況を示す貴重な資料となることを示しながら、そうした資料整理を水曜会という市民の会が地道に行っていることを知らしめることも大きな目的とした。また、それぞれの展示では実際に資料整理を担当した水曜会会員の展示解説も実施した（注13）。

いずれの展示も、津久井地域をはじめとした歴史や生活が窺える重要な資料が地元の施設に残されていることや、資料の整理を市民が主体となって実施しているのを示すことを目的としたものであり、さらに、博物館の根本をなす大事な作業である資料整理は一見すると地味であり、市民が継続的に行っていくには何らかの動機付けにつながる仕掛けが必要ではないかとの考えに基づくものである。

この動機付けという意味では前述の野外のフィールドワークも同様であるが、展示に関しては、博物館での整理作業はそれに留まるのではなく、展示等へもつながるといったことを具体的に表すのを狙いとして副題のように「市民の力で博物館資料へ」を強調したのであり､実際、

展示を見た方から水曜会に参加の希望があったり、他館から企画展への資料出展の依頼があったことは、継続的な資料整理を行っていくことへの意識を高めることとなった。展示が近くなると、準備に時間を取られて肝心の資料整理に手が回らなくなる問題があったものの、展示資料を選定する過程で、資料整理の方向性について改めて検討して共通の基準を作成するなど、以後の作業に対する見直しも行われた。

第３回目以降はしばらく展示は行わなかったが、平成29年度の収蔵品展「江戸から大正の津久井の姿～さまざまな資料に見る郷土の姿～」（2017年７月22日～９月３日）は、再度、津久井郷土資料室が保管してきた膨大かつさまざまな内容の資料を紹介することを目的としたもので、水曜会も展示の一コーナーを担当し、柳田からの葉書など、第３回目の展示と同様にこれまでに整理してきた多彩で興味深いさまざまな資料を展示した。

（４）福の会

水曜会とともにもう一つの資料整理を行う会が「福の会」である。市内南区下溝地区に在住の福田家は小田原北条氏の家臣とされる旧家（注14）で、福田家からはすでに近世～大正期の古文書580点が博物館に寄託されており、さらに追加の資料寄託のお話があった。加えて、歴史資料だけではなく蔵に収納されていた民俗・生活資料についてもこちらは寄贈のお話しがあり、それをきっかけに平成24年（2012）に「福の会」が結成された。先行して作業を始めていた水曜会が整理をしているのは津久井郷土資料室が保管する紙資料が中心であるのに対し、民俗担当として、有形の民俗・生活資料の収集や整理保管等の作業を市民とともに行っていくことを検討していたところに今回の申し出があり、これを契機としたものである。参加者は、別に市教育委員会が募集するボランティア組織である文化財普及員のうち、下溝地区及びその近隣に在住の方々を中心に、民俗調査会Ａの会員にも呼びかけ、福田家にちなんで会の名称は福の会、水曜会翌日の毎月奇数週の木曜日を活動日とした（結成時14名・29年度10名）。

福田家の蔵は、明治30年（1897）に建てられたもので、管理は現当主の母親が行っていた。そのためと思われるが蔵の内部には、釜や鍋・重箱・食器類といった日常の生活用具、３月や５月の節供人形、結納の品々をはじめ、なかでも着物や洋服等の大量の衣類などが収められていた。福の会の活動は、まず平成24年10月の２日間に渡り、蔵内部や現在は住んでいない主屋内部にあったモノの一部を外へ運び出すことに始まった。この際に仕分けをし、博物館に寄贈いただくことになったものは、11月に福田家から館へ搬入をして、その後、12月から清掃、洗浄を行い、同時に計測や写真撮影を進めて資料カードへの記録作業を開始し、くん蒸の後に収蔵庫へ収蔵した。福田家から寄贈された資料の全体数は、衣類が334点、衣類以外が177件を数える。

翌年には、収蔵品展「蔵の中の世界・福田家資料紹介～市民の力で博物館資料へ～」（平成25年５月25日～６月30日）を開催した。水曜会の展示と同様の考え方として、上記のような整理作業の成果をもとに、市民の重要な活動内容を広く一般に知らせることを目的に実施したもので、展示資料の選定や実際の列品作業も福の会会員が行った。展示では、節供関係や蔵の中に大量にあった明治末期から昭和までの結納目録やのし袋などの結納関係、主屋の神棚に祀られていた関東近辺から遠方の寺社などさまざまな地域の数多くの御札や御守り・掛軸などの信仰関係、釜や鉄鍋・笊・火鉢・湯たんぽといった日常で使用するものをはじめとして、漆塗りの椀や重箱のようなハレの日に使用するもの、機織道具や桑切包丁といった生業に関わる用具、蔵の中にもっとも多く収められていた衣類のうちから男物と女物のそれぞれの日常着と晴れ着・帯や履物・櫛や笄などの装身具など、多彩な資料を展示した。

展示会期中には、福の会会員による二度の展示説明も行われた。これも水曜会の場合と同様であるが、展示会において通常行われる資料やその背景等を企画者が「展示解説」するものではなく、実際に作業を行っている市民の目線から来館者とさまざまな点を会話することを目的に実施したもので、主に男性は生活資料、女性は衣類を担当した。時には整理作業における苦労や楽しさなどを織り交ぜながらの説明は、普段そのような裏話を知らない来館者にとっても好評だった（注15）。

さらに翌26年５月24日～６月29日には２回目の収蔵品展として「蔵の中の世界②～市民の力で博物館資料へ～」を行い、やはり福田家の蔵にあった婚礼用具や衣類をはじめ、福田家がある市内麻溝地区から寄贈された信仰や講中が保管する諸道具などの資料を併せて展示し、会期中に３回展示解説を実施している（注16）。

このように福田家の蔵の中の整理から始まった福の会であるが、福田家資料の整理作業が終了後には別のさまざまな資料整理を手がけており、新たな寄贈資料の整理のほか、収蔵庫内にある既存資料の確認や資料カードの作成等の再整理を行い、さらに取り壊された津久井郷土資料室にあった民具関係の収蔵作業にも当たった。当室の建物は、昭和27年（1952）建築で築60年以上に及び、

老朽化と耐震診断の結果取り壊され、すでに水曜会の整理のために運ばれていた資料とともにすべての資料が博物館へ移管され、それぞれ収蔵されることになった。福の会では、運送業者によって運ばれてきたそうした500件以上の民具関係の資料について、数か月をかけて収蔵庫内に新たに収納スペースを作りながら、収蔵庫全体の収蔵目録を作成してどの棚に何の資料が配架されているかを一目で分かるようにするなど、基礎的かつ重要な作業を手がけている。

（5）展示替え検討会

当館の常設展示は、天文展示室「宇宙の中のわたしたち」と、自然・人文部門の自然歴史展示室「川と台地と人々のくらし」に分かれており、自然歴史展示室は、「台地の生い立ち」（地質）・「郷土の歴史」（考古・歴史）・「くらしの姿」（民俗）・「人と自然のかかわり」（動物・植物）・「地域の変貌」（地理）の五つのテーマに分かれ、基本的には分野ごとの内容だが全体を通してみると通史的な展示になるように配置されている。そして、開館当初は定期的に展示替えを行う計画であったものの財政の課題もあり、発掘により得られた新たな資料の入れ替えなど小規模な展示替えが行われた程度で、基本的には開館以来変わっていない。

そうした中で、三テーマ「くらしの姿」は、開館20周年に当たる平成27年（2015）11月に一部の展示替えを行った。この展示替えには担当学芸員である筆者のみならず、市民学芸員有志による検討会議を開催し、そこで展示全般についての検討・企画のほか、実際の展示替え作業も実施して展示替えを完了させた。展示替えに到る直接のきっかけは、三テーマの展示では市内を中心とした地域による農具（風呂鍬と唐竿）の形態の違いを数多くの実物資料によって示しており、そのため当館所蔵の資料以外に周辺の六か所の博物館や資料館、教育委員会から13点の資料を長期借用していた。しかし、借用が長年に及び、借用先の担当職員も退職や異動により変わるなど、借用の経過が分からなくなる恐れが生じ、開館20周年を区切りに借用資料を返却することにしたのである（注17）。

この展示替えに際しては、基本的に経費は消耗品程度で造作を伴う大掛かりなものではなく、さらに資料も収蔵品を用いるものであるため、現状の構成自体は変更せず、展示資料及び解説文なども引き続き使用できるものは活用することを前提とし、そうした条件の元でより市民目線からの分かりやすい展示内容とすることを狙いとして、参加者と継続的な検討を行って展示替えを実施することを意図したのであった。

実際の検討会では市民学芸員に呼びかけ、第1回目の会合は平成26年（2014）3月に16名の有志が参加して行われ、三テーマ展示替えの趣旨や今後の進め方について話し合いを持ち、毎月第一水曜日の午前に検討会を行うことが決定された。また、新たな展示替えをするためには、やはり開館以来の展示の内容や狙いについて改めて認識するのが必要ということから、4～7月には現状の自然歴史展示室及び、三テーマの展示がどうしてそのような内容となったのか等の説明や課題の整理を行った。そして、参加者が多いことから、三テーマ「くらしの姿」だけでなく自然歴史展示室全体を検討の遡上に乗せることとし、「三テーマ検討班」のほか、他のコーナーを含めて古くなった解説パネルやキャプションを改訂する「解説パネル検討班」、常設展示室内に展示物をよく見ることで答えが分かる簡単なクイズを定期的に置く「クイズ検討班」というように班別にして、正月や祝日の関係で第一水曜日が休館日に当たる時などを除いて基本的に毎月それぞれの班別に検討を進めていった。

このうち「三テーマ検討班」では、班分け以降に再度、三テーマ「くらしの姿」の展示内容と狙いについて確認しながら従来の展示の課題と変更点を整理し、議論を詰めていった。その結果、平成27年（2015）4月からは月一回の検討会では時間が足りないということで、定例的な検討会の前の週にも半日程度の検討日を設け、細かく新たな展示内容とそれに合致する資料や写真の選定を進め、9月までに全体の骨子を決定した。その後、館内の調整や決裁等の手続きに入り、11月の休館日に3日ほどかけて順番に展示替えを行い、開館20周年に当たる11月20日の数日前の16日に作業を完了した。

本稿で述べてきた市民とともに行った展示替え作業は、もちろん当館にとっても初めてのことであり、直接的には前述のように長期借用資料の返却がきっかけになっている。しかし、検討の過程では、従来までの展示内容がなぜそうしたものとなっているか、どこに課題があるのかを踏まえた上で、新たな展示はどのようなものを目指すのかを館に対して意見を述べるという姿勢ではなく、市民目線からきちんと示すということを確認しながら進めていった。実際の議論の中では、さまざまな意見や実現したいことが出され、それらを尊重しつつも金銭面や時間・技術面などで無理なこともあり、できる点とできないことを踏まえて、さらに参加しているメンバー相互の意見の一致を図ることも当然ながら必要であった。

結果的には、返却した借用資料に代わる別の風呂鍬や唐竿を展示するのではなく、既存の風呂鍬や唐竿の展示

点数を圧縮して、空けたスペースに市域が畑作の卓越地域であることから、麦の播種から脱穀調製までの畑作の諸道具を展示するとともに、養蚕の部分に製糸に用いる道具を加えるといった、他の館でよく見かけるようなオーソドックスなものとなった。それでも展示全体の検討から展示替え作業までを市民とともに行ったことは、当館の市民協働のあり方として重要なものとなったことは言うまでもない。

こうして展示替えの作業は終了したのであるが、他の会と同様に、「三テーマ検討班」・「解説パネル検討班」・「クイズ検討班」のいずれも活動を継続している。このうち「三テーマ検討班」では、期間を区切ったミニ展示を実施することとし、28年度は年間を通じて展示替えした内容の補足の意味もあって養蚕をテーマとし、29年度は、毎年秋に市民学芸員が全般的に担って実施する学習資料展に合わせるように学習資料展の期間中に運動会の資料を展示したほか、津久井地域の絵葉書の展示も行い、30年度は冠婚葬祭時のハレの機会の食器類のミニ展示を行った。それらのテーマについても「三テーマ検討班」のメンバーと検討して、さまざまな観点から内容を決定している。

おわりに

当館のようないわゆる地域博物館の役割について、地域博物館の旗頭とも称される平塚市博物館で長年、生物担当の学芸員（後に館長）を務めた浜口哲一は次のようなことを述べている（注18）。

大規模な開発をするときには、その開発によって地域の環境にどのような影響があるのかを調査する環境アセスメントが必要となるが、当時、まだ法律ができたばかりで、環境アセスの調査業務はいわゆるコンサルタント会社が請け負うことになる。しかし、こうした状態に対して、今後、その地域に住んでいる住民自らが環境評価の意見書を提出するような意識の高まりが不可欠であり、地域の自然をよく知り、それと主体的に関わるような市民が育つことがきわめて重要な意味を有するということ、つまり、市民参加を伴うようなさまざまな活動を博物館（学芸員）が市民とともに行っていく必要性を説いている。

このような地域博物館の視点については、現在では地域博物館自体の設立から相当の時間が経過しており、時代の状況に照らした批判的な検討が必要ではあることは当然だが、それでも重要な指摘であることは言を俟たないであろう。

筆者も当館でさまざまな活動を展開するに当り、地域博物館の存在意義の一つとして、市民自らが博物館と係わる中で、自分たちの生活する場所がどのような地域であるのか、地域の多様な歴史や文化を認識するとともに、地域の将来のあり方について考える資料を作り出していく活動を継続して展開する拠点としての役割があり、しかもその成果を蓄積して次につなげていくことが重要と捉えてきた。また、民俗分野の学芸員として、一般の市民にとっての民俗の魅力とは何か、何を売りに民俗分野として活動していくかを考えた場合、やはり歴史や文化はかつて学校で習った年表を記憶するようなものではなく、自らの身の回りにも姿を見せているものを改めて発見すること、地域の歴史や文化をバラバラではなく自分たちの生活と係わらせて捉え、それらを自分たちで掘り起こしていくことが大切であり、そうした視点でいかに市民とともに活動していけるかというものであった。

開館後20年以上経過し、当館においても多くの市民の会がさまざまな活動に係わり、実際問題としても、今やそうした市民の力なくては館の運営が成り立たなくなっている。当館において、筆者が民俗分野において実施して来た市民とともに行う活動は本稿に記してきたとおりであるが、その際に留意してきたことは、決して学芸員が行わなければならないことの仕事を下請けに出しているわけではないということであり、これは言うまでもなく当たり前であくまで一緒に行う「協働」の関係ということである。そして、活動自体が学芸員自らも楽しく、意義のあるものとして共有し、作業に当たっての環境を整えながら、さまざまな意味でモチベーションを高めるような動機付けを継続的に行い、実践した成果を公開し蓄積して次の活動に繋げていくことである。例えば、福の会や水曜会において皆で整理した結果を展示すると、自分たちがやった作業が、博物館のどういう内容や活動につながっていくのかが目に見えて分かることになり、博物館や地域のためにも役に立ったという認識や想いが継続の力となる。

さらに、活動が自己満足に終わらずに、絶えず自分たちの活動の意味や役割を学芸員のみならず参加者も含めて確認することが大切であり、一生懸命やればやるほど、自分たちの回りのことしか見えなくなってしまう恐れもある。博物館をいろいろな立場で訪れる人々からどう見られているのか、他の来館者がどのような気持ちで見ているのかということを考え、独りよがりにならずに、何のためにやっているのかということを、きちんと自覚しなければならないのである。

現代社会において、市民の要望やニーズが多様化・多層化している中で、今後とも博物館には小中学校への学習支援や市民協働をはじめとしていろいろな役割が求められている。例えば、博物館活動に拠る地域の歴史や文

化の掘り起こしを通じた「まちおこし」の視点や、観光による地域振興と博物館の関わりなども当然重要なものであろう（注19）。こうした市民と協働して行う活動にゴールはない。長期に渡る活動は、担当者・参加者ともに世代交代をして代わっていき、逆に代わっていかなければ活動が停滞していってしまう恐れもあるが、いずれにしてもより良い市民協働とそれによる博物館運営や活動の展開を積み重ねていくことが必要であり、市民とともに歩む博物館として継続して取り組むことが重要である。そのためにもどのような点に留意して活動を行ってきたかを検討することが必要であり、本稿で記してきた取り組みの実践とその経過が、何かしら今後に生かされていくものとなれば幸いである。

注

（1）「市立博物館20年の歩み～特別展・企画展・収蔵品展～」『研究報告』第24集　2016、及び「市立博物館20年の歩み〈No. 2〉～民俗分野の教育普及活動～」『研究報告』第25集　2017

（2）展示活動協力員が発展したもので、現在も引き続いて活動している。市民学芸員が他と異なる点は、他のグループが特定の分野に基づく内容であるのに対し、市民学芸員は特定の分野に限らずに館の教育普及活動全般にさまざまな形で係わる活動を行っている。

（3）講座開催中の調査成果は『研究報告』第14集～16集（2005～07）において「市民が調べた相模原市内の「団子焼き」」〔No. 1〕～〔No. 3〕として報告したほか、調査と報告の趣旨については〔No. 1〕で、講座を実施していた3年間における調査全体のまとめと分析は16号の〔No. 3〕で行った。さらに講座終了後の平成19年以降も市民有志とともに各地の調査を継続し、その成果は第17～25集（2008～17）において「市民が調べた相模原市内の「団子焼き」〔No. 4〕～〔No.12〕として報告している。

（4）民俗調査会の結成の経過や活動については、21年度の企画展の開催結果とともに『研究報告』第19集「歩く・聞く・見る・展示する～秋季企画展「市民と歩いた横浜への道」開催記録と民俗調査会の活動～」（2010）の中で記している。

（5）調査会Aは平日開催で参加者が17名と少なかったこともあり、Bと同様に二班に分けて活動したが全体としてはまとまって活動することも多かった。

（6）ここではあまりに煩雑になるため、展示以降の両調査会のフィールドワークや活動について、おおむね行った順にテーマのみを記す。

（調査会A）

相模原民俗マップを作る（本文で紹介）／大山道を歩く／新市域（津久井地域）を歩く／村を歩く Part. 2／恩田川流域石工等調査（本文紹介）／県内の道祖神碑を見る

（調査会B）

中世の道（当麻～府中―鎌倉道）・近世の道（府中～八王子―甲州道中）・近代の道（八王子～橋本―絹の道）を歩く／津久井道／八王子道から東海道（古淵～藤沢宿～箱根宿）へ／町田観光ガイドブックを歩く／東海道藤沢宿から川崎大師へ

これらのテーマは、その都度参加者と相談しながら決めていったものであり、他の館の活動と関連して実施したものも多い。また、例えば小正月の道祖神祭祀や夏場の天王祭など、特徴的な行事の見学会なども折りに触れて行い、これらは当初からＡＢ合同の見学会として実施していたが、近年の状況として、調査会会員の諸般の事情による減少等を受け、2017年7月からはＡＢの会員を統合して一つの会となっている（23名）。ただし、活動自体は従来までと変らず月二回の実施である。

（7）加藤隆志・刈田　均・羽毛田智幸・相模原市立博物館民俗調査会Ａ・横浜市歴史博物館民俗に親しむ会　「相模原市立博物館「民俗調査会Ａ」と横浜市歴史博物館「民俗に親しむ会」の交流会記録」『研究報告』第21集　2013

（8）大山の記録は、加藤隆志・刈田　均・羽毛田智幸・相模原市立博物館民俗調査会Ａ・横浜市歴史博物館民俗に親しむ会　「相模原市立博物館「民俗調査会Ａ」と横浜市歴史博物館「民俗に親しむ会」の交流会記録②」『研究報告』第22集　2014　に記載している。また、川崎から横浜の記録は、刈田　均・羽毛田智幸・加藤隆志・横浜市歴史博物館民俗に親しむ会・相模原市立博物館民俗調査会Ａ　「横浜市歴史博物館「民俗に親しむ会」活動報告」『横浜市歴史博物館調査研究報告』第10集　2014参照。

（9）刈田　均「横浜市歴史博物館「民俗に親しむ会」活動報告」『横浜市歴史博物館調査研究報告』第11集　2015。なお、本文中の民俗に親しむ会からの石工関係データ提出についての依頼の経過なども併せて記されている。

（10）刈田　均「横浜市歴史博物館「民俗に親しむ会」活動報告」『横浜市歴史博物館調査研究報告』第12集　2016。本号には、企画展「鶴見川流域のくらし―生業・水運・信仰―」開催と民俗に親しむ会との係わりについても触れられている。

（11）ここでは主に調査会Ａの活動について触れたが、調

査会Ｂについては、毎年、当館の開館記念日である 11 月 20 日前後の土日曜日に実施する「学びの収穫祭」において発表を行っている。学びの収穫祭は、博物館を舞台に活動する各分野の市民の会をはじめ、学生や地域団体等が日頃の活動内容及び調査研究の成果を発表するもので、市民協働を展開していく上でも当館の重要な年間行事の一つと位置付けられている。民俗調査会としては調査会Ｂの活動を中心に報告しているほか、福の会や水曜会も継続的に参加している。

(12) 柳田関係の資料の詳細については、加藤隆志・水曜会「資料紹介　柳田國男関係資料について」『研究報告』第 26 集　2018 参照。

(13) 水曜会の展示は、小澤葉菜・福の会／加藤隆志・水曜会「「市民の会」による展示の記録～「福の会」及び「水曜会」の平成 25 年度収蔵品展」『研究報告』第 22 集　2014 参照。

(14) 福田家の来歴や収集資料があった主屋・蔵等については、小澤葉菜・加藤隆志「相模原市南区下溝の福田家の来歴とその蔵などについて　付　下溝地区・福田家の蔵収蔵資料の整理について～市民協働による資料整理の試み～」『研究報告』第 21 集　2013 参照。

(15) 平成 25 年に実施した展示については、注 13 の福の会の展示についての記載を参照のこと。

(16) 小澤葉菜／加藤隆志「「福の会」の活動について」『研究報告』第 23 集　2015

(17) 三テーマ展示替えの経過や展示替え後の新たな展示内容については「自然歴史展示室･三テーマ「くらしの姿」展示替えについて～市民協働による展示替えの経過～」『研究報告』第 24 集　2016 参照。

(18) 浜口哲一「博物館の調査活動における市民参加」『平塚市博物館年報』第 9 号　1986

(19) 注 18 の中で浜口は、博物館でやることは科学性や客観性を持つことが必要であり、調査への市民参加は「調査体験への参加」ではなく「調査への参加」でなければならないとしている。例えば「まちおこし」や観光を通じた地域振興であっても、現代においてはやはり「本物」でなければ駄目であり、その中から地域のあり方を考えていく視点が重要であるのは言うまでもない。

写真１　民俗調査会会員の説明（民俗探訪会）

写真２　田名地区の道祖神を見る民俗に親しむ会会員（交流会）

写真３　整理作業（水曜会）

写真４　展示資料の撤収（水曜会収蔵品展）

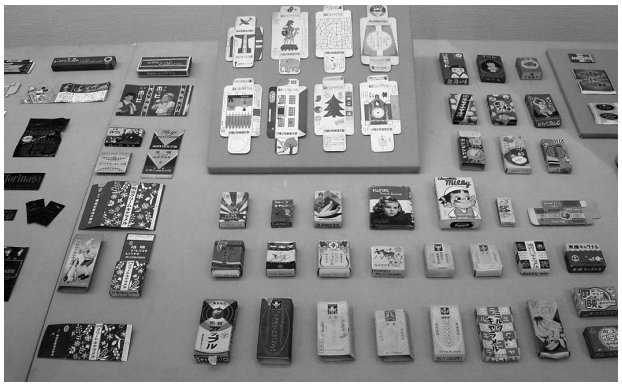


写真５　展示した菓子関係のパッケージ（水曜会収蔵品展）

写真６　展示の様子（水曜会収蔵品展）

写真７　資料の洗浄（福の会）

写真８　資料の整理（福の会）

写真９　信仰関係資料の列品（福の会収蔵品展）

写真 10　展示説明（福の会収蔵品展）

写真 11　取り替える風呂鍬の片付け（三テーマ展示替え）

写真 12　新しい資料の設置（三テーマ展示替え）

（※）津久井郷土資料室の資料整理に関しては、これまでに何回かに分けて行われている。

（１）相模原市との合併以前に当時の津久井町史編さん担当によって行われたもの。

①近世～昭和期までの古文書や記録数549件・686点

②さまざまな資料（例えば役場資料・チラシ・パンフレットなど内容は雑多で、同様のものが未整理分に含まれていることもあり、選定基準は不明）506件・1,482点

③手紙・葉書類496点

④ポスター類274点

（２）合併後の平成20年（2008）に目録を作成した、津久井地域に関する絵葉書437点

（３）博物館への移動に際し、郷土資料室内に開架されていた資料を目録化したもの。

①「少年倶楽部」や「キング」などの雑誌や、民俗学の「郷土研究」及び柳田國男の著作本など4,900点

②教育委員会や地域研究団体発行の報告書・研究誌、その他のさまざまな雑誌・刊行本等11,966点

③第二次世界大戦前～以後に及ぶ教科書類2,509点

④戦前～戦後の新聞（多い順に朝日・神奈川・読売・産経・東京朝日・毎日・横浜貿易・その他）18,766点

⑤津久井地域以外の絵葉書12,100点（123組）

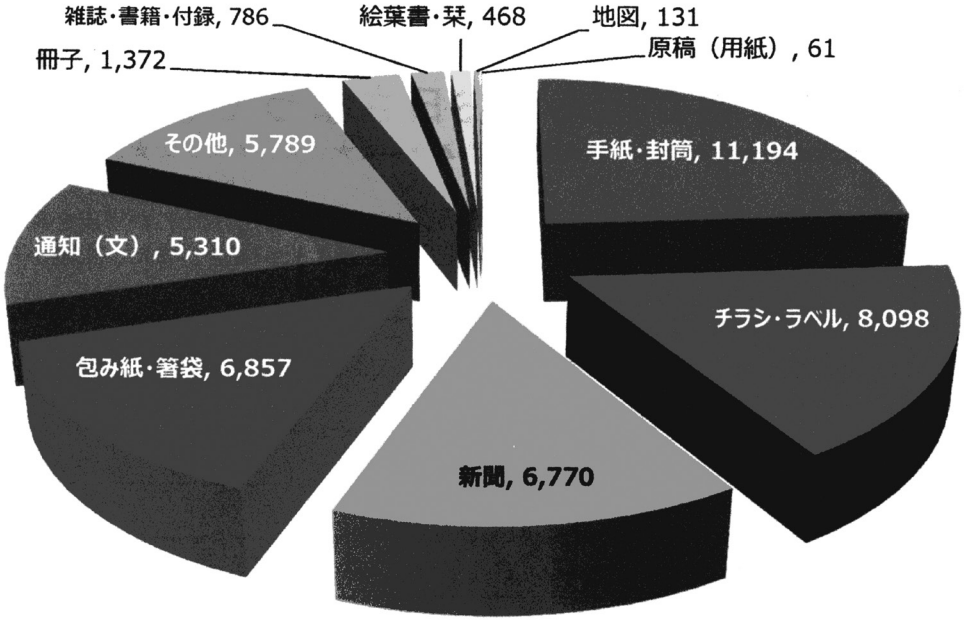
⑥その他（尾崎咢堂・天野貞祐関係他）293点

（４）今回の水曜会が整理したもの（下表のとおり）

なお、このほかに民具類があり、それらは博物館に運ばれて、福の会で整理したことは本文中に述べた。

「水曜会」鈴木重光資料目録　登録数量

登録点数と形態での分類（2019年1月16日現在）

形態名	登録件数
手紙・封筒	11,142
チラシ・ラベル	7,946
新聞	6,712
包み紙・箸袋	6,702
通知（文）	5,307
その他	5,642
冊子	1,367
雑誌・書籍・付録	700
絵葉書・栞	468
地図	131
原稿（用紙）	61
	46,178

年別登録件数		
2011年		1月より開始
2012年	950	11月に新データ形式への変更
2013年	5,725	
2014年	8,400	
2015年	9,526	
2016年	9,300	
2017年	6,959	
2018年	5,850	5月末で旧書式のデータ書き換え終了
2019年	126